

## 令和元年度審査会講評

今回、研究事業として11の研究論文の提出をいただきました。

前年度の7から比べますと4つ多くなりました。

部門別の内訳は、施設管理に関するもの5件、催事等実施報告に関するもの2件、経営に関するもの2件、自然科学に関するもの1件、歴史・文化に関するもの1件となっています。

提出者の所属別で見ると宮崎科学技術館4件、大淀川学習館5件、宮崎市歴史資料館1件、宮崎市民プラザ1件となっており、すべての施設から提出がありました。

研究の望ましい姿は、実態から課題を把握し、課題解決のための仮説を立て、理論、実践研究を行い、結果を考察し、成果と課題を明らかにしていくものです。この研究の基本は、業務にも十分活用できるものです。今後とも、この一連の考え方を重視しながら研究にとどまらず、業務にも取り組んでいただきたいと思います。

研究論文の審査の過程において、審査員から次のようなご意見や感想がありましたので、ご紹介します。

- ① 研究論文のテーマ及び内容は、施設運営・業務、事業運営上の課題を掘り下げ、改善の方向性を具体的に示すものがほとんどであり、高く評価できる。
- ② 実証を踏まえて、説得力のある論文がある一方で、改善策や進むべき方向性の具体的提案が今一步という論文も見受けられたので、さらに研究を深めてほしい。
- ③ 現状や実態把握のための調査は、研究を進める上で基本となるものであるため、調査の目的、対象や項目(内容)などをより明確にする必要がある。
- ④ 写真や図表、文字のバランスと配置など、構成にも気を配った論文が見られた。今後、読み手に意図が伝わるよう論文の構成・体裁を工夫するなど、さらなるレベルアップを期待したい。

日常業務のかたわら、時間を調整し、研究活動を行い、論文を取りまとめいただいた職員の皆さんの努力に敬意を表します。

これからも、当協会に課せられた課題と正面から向き合い、実践をベースに、さらに多くの職員が自己啓発の意味でも研究事業にトライしていただくことを期待します。

## 経営部門

### 実態に基づいた運営方法の見直しについての研究 ～ボトムアップ型組織への組織再構築を通して～

大淀川学習館 副館長 上村 直輝

この研究は、課題対応力の高いコミュニケーション型へ組織を再構築する過程において、ボトムアップ型組織として基礎を固めるための検証を行ったものである。

その方法は、「課題意識の見える化」、「問題解決的フィードバックのシステム化」、「環境整備による効率化」を三つの柱として、業務改善し、実践に則して検証しており、この点をまず評価したい。

この三つの柱に基づき、職務遂行自己評価シートを作成し、業務にあたって常時意識しておくべき事項の「見える化」や業務についてのプロジェクトチームの編成と意見交換の場の創出、事務室のレイアウトの変更をはじめとする具体的な取り組みも行っている。

どんな職場でも求められている職員の目標把握や課題、問題意識等の保持について抽象的な部分を言語化したことで、具体的な実践につながっており、ボトムアップ型組織としての機能を強化しながら、組織の活性化を図って欲しい。

## 経営部門

### 指定管理更新にともなう事業改善方法に関する研究 ～社会的アプローチを通して～

大淀川学習館 副館長 上村 直輝

指定管理更新にともなう事業改善に対して、エスノグラフィ的手法を用いて分析を行い、この更新作業がどのような意思決定過程を経て、どのような影響を受けているのかを明らかにしようとする研究である。

意思決定過程を独自の視点で整理・分析することで今後の指定管理更新作業において、課題解決や館の発展について、効率的に検討するための基礎形成を目指そうとしたもので、このチャレンジをまず讃えたい。

指定管理更新作業の工程を解りやすく図や表にまとめ、『素材収集から試食』までといった料理の手順に置き換え、さらに、意思決定過程の分析を実際と反省に分けて表現し、視覚化するなど、読者がより想像しやすくわかりやすい工夫を行っている。

事務作業から審査までの一連の行為を、単なるマニュアル化ではなく深化させることで、手順だけでなく思考という部分で整理した点を評価したい。

今回の研究の成果が、次期指定管理更新事務に生かされることを期待したい。

## 歴史・文化部門

### 極楽寺自治会所蔵『涅槃図』の図様について

みやざき歴史文化館 学芸員 松下 朋生

この研究は、極楽寺自治会所蔵「涅槃図」の図像や画面形式を記録・整理し、涅槃図の先行分類と比較しながら、この自治会所有の涅槃図の特性を紐解いたものである。

学芸員として専門的立場から、涅槃図の概要や形式を踏まえ、これまで、中野玄三氏の示してきた分類法と竹林史博氏の唱えた分類法を踏まえて、検討を重ね「制作年不詳のものを江戸時代中期以降の作品」と結論付けた点は大いに評価できる。

涅槃図や仏教絵に馴染みのない者でも分かりやすく論文にまとめてあり、かつ引き込まれる内容となっており、解説力の高さが感じられるものとなっている。

収蔵品を分析し公開することは、市民に対して身近にある文化財の歴史的価値を理解してもらい、地域の歴史に興味をもつきっかけづくりになると考える。

今後は、このような研究の積み重ねにより、展示物の特性を解明し、その魅力を伝えていけるような企画展等を期待したい。

## 自然科学部門

### 夜間における大淀川学習館周辺の昆虫調査

#### ～学習館の夜間イベント拡充を図るために～

大淀川学習館 業務係長 日高 謙次

技師 園田 恵子

技師 永田 涼花

この研究は、教室事業として好評を得ている「明かりに集まる昆虫観察会」を拡充するために取り組んだものであり、人材育成も踏まえた内容となっている。

講師の高齢化や機械トラブルなどの不測の事態も考慮し、外部講師に頼らず、自前の職員で実施するための方策を探りながら、長期の昆虫観察・調査を粘り強く行った努力に敬意を表したい。

今回の調査で、希少種や宮崎県初記録といった種類を確認することはできなかったが、チョウ目61種、カミキリムシ科55種の追加と目録を作成することができ、さらに、調査のノウハウの蓄積が得られた点も大きい。

また、職員一人に依存しないように、技師二人を同行させ、人材育成にも注力しようとする姿勢も評価したい。

今回の研究をもとに、「里山の楽校」の有効活用に弾みがつくことを期待するとともに、ホタル観賞と並ぶ夜間イベントを拡充させてほしい。

## 施設管理部門

### 展示物の有効活用をはかり魅力を最大限に伝える手立て

#### ～展示順路の在り方を通して～

宮崎科学技術館 展示係長 谷口 亜衣

この研究は、アンケートによる調査、検証に基づき、これまで示していなかった観覧のための順路を「家族向け」「カップル向け」「幼児向け」と対象者ごとに作成を行うというものである。

今までありそうでなかった「順路」に着眼し、初めての方にとってもリピーターの方にとっても宮崎科学技術館の魅力を伝えることを目的とした来館者にとって有意義な研究である。

アンケート結果から、体験型の展示物に人気があることや展示物の目玉である、日本に1台しかないアポロ11号月面着陸船イーグル号に対する来館者の反応が薄かったことなど、展示物の価値を伝えきれていない面も明らかになり、順路を考えるうえで価値ある調査であったと評価したい。

今回の研究の着眼点をインストラクター全員で共有し、館として、「来館者に見て欲しい展示物は何か」、「その展示物で何を感じて欲しいのか」など、順路を通して館から来館者へのメッセージとなるような順路マップになることを期待する。

## 施設管理部門

### より多様な方に対応できる展示解説の手法について

宮崎科学技術館 主任主事 落合 郁香

宮崎科学技術館の長年の懸案である展示物等の表示の多言語化については、訪日外国人の増加が見込まれる中、早急に取り組まなければならない課題である。

この研究では、施設の多言語表記について現状の問題点を明らかにし、他館視察や、職員の見解を聞き、わかりやすい表記をめざした努力の跡がうかがえる。

また、展示物の仕分けを行い経費的なことも考慮に入れ、展示素材まで踏み込み、さらに、来館者にとって利用しやすい多言語化ツールは何なのかを模索し、成果品完成の目途がついたことは大いに評価できる。

多言語化・多言語表記は、協会管理施設でも共通の課題であり、他館にも活用・応用できる内容で大変意義深い。

今後、アプリやQRコード等を活用したスマートフォンとの連携をはじめとする様々な媒体の活用など来館者のニーズに応じた多言語化・多言語表記について、研究を継続してほしい。

## 施設管理部門

### ダジック・アースを活用した小規模企画展「ミニアポロ展」の開催

宮崎科学技術館 天文係長 安達 大輔

この研究は、ダジック・アースについて数年かけて丹念に行っているものであり、いかに経費を抑えながら、一方では効果の高いものを来館者に示すかということに具体的に取り組んだものである。

今回の「ミニアポロ展」で設置したダジック・アースでは、来館者の反応も良く、大型の常設展示に向けた課題抽出をしっかりと行い、次に繋げていこうという点は高く評価できる。今後の課題と展望について国連の示すSDGsに関する取り組みとして「環境」という側面から提案している点も非常に興味深い。

また、視察先で実施していたように大型ダジック・アースを前に児童生徒向けの学習解説が可能となれば、プラネタリウムと合わせてさらに天文への理解を深めるきっかけとなると考えられる。

限られた資金やスペースの中でどう工夫し、実現していくのか、今後のさらなる研究の深化が楽しみである。

## 施設管理部門

### 収蔵庫の機能回復と標本管理方法の確立

大淀川学習館 技師 園田 恵子

この研究は、大淀川学習館の収蔵庫について、これまで、収蔵資料の整理保存が不十分であったことを契機に、その機能回復を図り、標本登録台帳のベースを作ることで、小規模館でもできる持続可能な収蔵庫の管理・運営方法を模索したものである。

館内展示や貸し出し、同定作業などに利用される標本やはく製などの資料について、温湿度管理をはじめ、防虫・防カビ対策、収蔵数確認や収蔵資料名の把握を行い、鱗翅目の標本登録台帳の整理をするなど、小規模館でも継続していくことが可能な保存・管理方法の構築を目指すものであり、今後につながる重要な取り組みであると評価する。

また、文献を調査し、温湿度の管理を的確に行うことで館の消費電力を増やすことなく管理できる方策を模索している点も評価できる。

今後はこの収蔵環境の維持や、職員の入替わり等により登録作業が中断されることなく着実に取り組んでいくことが望まれる。

## 施設管理部門

### ホールにおける避難誘導に関する考察

宮崎市民プラザ 技師 末廣 信太郎

この研究は、東日本大震災を教訓にした「避難訓練コンサート」が全国各地で行われていることに着目し、視察先の避難訓練コンサートに実際に観客として参加するなどして、非常時の観客や職員の動きを観察し、市民プラザの今後の避難誘導や避難訓練に生かそうとするものである。

ヘルメットを使っての自衛消防組織の表示、主催者側からの避難誘導員の配置図の提出及び避難誘導員用のヘルメットの配備、連絡用のトランシーバーの設置など個別具体的な内容について、先進地の状況を踏まえ整理した点は評価できる。

今後は、災害発生時のスタッフが少なかった場合の対応など、残された課題を逐次解決していくとともに、市民プラザでの避難訓練コンサートを実現させ、それを契機に他の協会管理施設でも実際に来館者も参加する手法を用いた避難訓練が行われることを期待したい。

## 催事等実施報告部門

### 科学の世界へグッと引き込む事業展開を目指して

宮崎科学技術館 主事 中島 星七  
主事 濱川 葵

この研究は、「科学」を学びにつなげて欲しいという考えのもと、科学技術館が来館者から愛される特別な教育施設となっていくことを期待し行ったものである。

今後のサイエンスショーを行うにあたり「見（魅）せる」「共に考える」という事業展開を作り上げることを目指し、具体的にサイエンスショーを考案、実践した点は評価できる。

また、開館当初から設置されている理科の原理原則を伝える展示物を丁寧に説明するという、ガイドツアーの取り組みは来館者の新たな興味発見に寄与するものである。

研究を通して、科学館の展示物の原理原則を深く学ぶことができ、来館者のニーズに合わせたコミュニケーション力をさらに磨くことができたことが研究者自身のモチベーション向上に繋がり、このことが他職員にも波及することを望みたい。

今後、『サイエンスショー』のような特別なことではなくても、新たな見せ方・考え方・つなげ方を作り上げていく必要性を認識し、今後科学の入り口をどう開いていくかその取り組みを期待したい。

## 催事等実施報告部門

### 「絵本の読み聞かせ音楽会」の継続的な実施と充実へ向けて

大淀川学習館 学芸員 齋藤 加那子  
技師 永田 涼花

この研究は、大淀川学習館で以前から人気の企画「絵本の読み聞かせ音楽会」について音楽経験のある職員が退職するなどの理由で、開催継続が困難となった局面を乗り越え、中学校の部活動と連携し、内容の充実化を図ったものである。

具体的には、宮崎北中学校の協力を得ながら、一方では他校にもアンケートを実施し、課題を抽出し、その過程から新たな出演校も掘り起こせたことは評価に値する。

また、コンサートの実施にあたっては、紙人形劇やクイズ、替え歌などで生き物と関連付けするなど、学習館としてオリジナリティを高める工夫が見られる。

学校との連携となると、日程調整、人員調整、移動運搬手段等クリアすべき多くの課題もあるが、さらなる広がり期待するとともに、今後、中学生だけでなく、高校生など他の人的資源を発掘し、活用するなどこの取り組みへの工夫発展を期待したい。

#### 令和元年度研究事業報告書審査会

公益財団法人宮崎文化振興協会理事長	小泉 英一
専務理事兼宮崎科学技術館長	中石 康弘
事務局次長兼経営戦略課長	和田 尚子
みやざき歴史文化館副館長	中武 寿裕
宮崎市民プラザ副館長兼企画総務課長	鎌田 安彦